都道府県別賞一等

「もしも」のための生命保険

富山県　高岡市立牧野中学校　一学年

出江　絆愛

みなさんは、生命保険について知っていますか。私は、『何もないのに毎月お金を払わなければいけない』『もったいない』など、保険に対してネガティブなイメージしかなく、なぜ大人がそうまでして保険に加入するのか分かりませんでした。でも、ある話を聞いて私のこれまでの考えは大きく変わりました。

私には伯母がいます。中学校の先生をしていて、よく動く、元気な人です。休みの日には一緒にショッピングモールに買いものに行ったり、映画を観たりします。その伯母に「保険って無駄じゃない？」と話すと、伯母は、「絶対に若いうちから入った方がいい。」と言いました。そして、こんな話をしてくれました。

伯母は、二十九歳のときに乳ガンにかかったことがあるそうです。早期発見で大きなことにはならなかったらしいですが、普段の姿からは想像できず、とても驚きました。そして更に驚いたことに、一度大きな病気をすると生命保険にはなかなか入ることができず、とても困ったらしいです。『病気にかかると将来に向けての備えが心配になり、保険に期待する気持ちは強くなるのに、入れないなんておかしい』と私はその話を聞いて思いました。『お金が必要なときにもらえないなら、保険に入る意味はない』と思ったからです。しかし、伯母は「保険は確かにお互いを助け合うものだけれど、病気にかかりやすいリスクのある人ばかりが入っていても成り立たないから、会社はつぶれてしまう。」と言っていました。保険は、万が一の備えのために入るものです。みんなでお金を出し合い、入っている誰かにもしものことがあった場合、保険会社からお金が支払われます。私はいざというときにお金が必要なのであれば、預貯金をコツコツしていけばよいと考えていました。しかし、伯母の話をきっかけに、保険について調べてみると、今まで知らなかったことをたくさん知ることができました。預貯金は少しずつ貯めていくのですぐにお金を用意することはできないけれど、保険は入ったときから「もしも」の備えができます。「もしも」が運良く起こらなかった場合、お金は受け取れないけれど、あらゆる不安を少しでも軽くするために、保険に入りたいという思いが生まれてきました。保険料は、「一般的に病気にかかりにくい若いうちに入った方が値段が安い」というのも初めて知りました。ガンという病気は、自分には遠いものだと思っていたけれど、こんなに身近にいたので決して無関係なものではないと思いました。

二十代の加入率は六～七割と低いようですが、私は働いて稼げるようになったら必ず入りたいです。

人生一〇〇年時代、日本人女性の平均寿命は約八七歳で、一九四七年に比べて、三十年以上延びているそうです。私は限りある人生を明るく楽しく過ごしていけるように、いろいろなリスクに備えていきたいです。そして、健康な体を大切にして、やりたいことに精一杯、全力で取り組んでいきたいです。